
たとえば、君が視線を捧げるその先に

沙希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たとえば、君が視線を捧げるその先に

【Nコード】

N0824S

【作者名】

沙希

【あらすじ】

父親の海外赴任をきっかけに、五十鈴美弥は高校の女子寮に入ることになった。高校三年生からの突然の寮生活に不安を覚えるが、同室が女子寮長を務める友人だと知って一安心する。だがその一安心も、あっという間に吹き飛ぶことになった。寮生として認められるには『入寮試験』を受けなくてはならないというのだ。しかもその試験内容というのがちょっと変わっていて……。 (短編小説『たとえば、水色の空が青色の空に変わった日』と同じ舞台設定ですが主人公は杏奈と春哉から、美弥とコウに変わります。

主人公たちが違うこと、また時間軸が違うことから前作を読んでいたなくても大丈夫です。＜本作品は以前、別サイトにて連載していたものを転載したものです。＞

美弥の事情

それは高校二年生、後期の学期末の頃だった。

学期末試験に苦しむ私に父が突然、四月からアメリカへの転勤が決まったと言いだしたのである。

海外出張どころか国内出張もほとんどしないような人だったから、私たち家族にとってそれはまさしく青天の霹靂だった。

そしてそれから四月までがあっという間だった。お母さんと弟もアメリカについていくことになり、諸々の準備に家族全員が忙殺されたのである。

ちなみに私は日本に残る。

家族と一緒にアメリカに行くことも考えたけれど、大学受験のことも考えて、日本に残ることにしたのだ。アメリカに渡ってアメリカの大学に入る、という選択肢も考えられたけど、高校三年生からの転校というのがネックだった。それに英語の授業は好きだけれど、それとアメリカの高校や大学で過ごすのはわけが違う。

というわけで私は、現在通っている高校の寮に四月から入ることにした。

中高一貫校の寮で普通は中学一年生から、あるいは高校一年生から入寮するものを、校長先生や担任の先生に相談してなんとか入ることができた。頼れる親戚が近所にいないうちの家族にとって、私が日本で生活する方法は寮以外なかったのだ。一人暮らしも提案してみたけど、すぐさま却下された。

まあ、一人暮らしに関してはやっぱりさみしいし、高校生の私には確かにまだ早いなって思ってたすぐ納得したけど。

ああでもやっぱ、大学生とかになったら一人暮らししてみたいかも。

……ってごめんね、杏奈。話しがちよっと脱線しちゃった。

「んなことないよ。どうして寮にいるのか聞いたのは私のほうだし。春休み終わって寮に帰ってきたら、美弥がいるんだもんなく。ホント、ビックリしちゃったよ」

女子寮の二人部屋。

私のルームメイトになった藤原杏奈がにっこりと微笑む。

艶やかな黒髪のロングヘアに縁取られた顔が文句なしに美しい杏奈は、この千早学園中学高等学校の女子寮をまとめる寮長だった。

私も杏奈も中一からずっとこの千早に通っているけれど、目の前のベッドに座ってにこにこ私のお話を聞いてくれる美人とは違い、私はずっと自宅通学者だった。

そんな私が、しかも最高学年の人間がいきなりポンっと寮に入って上手くいくはずがない。噂には聞いていたが、寮には守らなくてはならない規則が多いことが実際に入寮してみるとよくわかる。もともと私は毎日毎日外を出歩いて遊びまわるタイプじゃないから門限なんかはなんともない。だが問題は『目に見えない規則』ってやつである。

中学一年生から高校三年生までの子供たちが集まって集団生活を

するわけである。当然、彼女たちの間には（男子寮のことはとりあえず置いておく）先生たちが介入できない、あるいはわざとしないルールが存在する。

さっきも杏奈に聞いてみたけれど、たとえば寮の朝食。下級生は少しだけ早く食堂に着いて、率先して上級生の分の配膳をしたり手伝ったりするらしい。もちろん決められた規則ではない。けれど下級生たちはそういう行動をこなすことで、上級生へとっていくわけである。もちろんその分、上級生たちは積極的に下級生の面倒をみる。

そしてそんな通過儀礼を一切こなしてこなかった人間が急遽、寮に入ったら誰も彼もがやりにくいに決まっている。

杏奈はそうとは言わないが、寮長である彼女と私が同室なのは故意的なものがあると思う。寮の部屋割りの基本、無差別のクジらしいけど、今回は先生たちが配慮してくれたに決まっている。

じゃなきゃ、寮の事を知り尽くし、かつ寮内で絶対的な発言力を持つ寮長と同室なんてラッキーすぎる。

しかも杏奈は大大親友とまではいかなかったが、中一からの仲のいい友達だ。それに一年間、ルームメイトをしていれば自然とそうなる気もする。

というか変な意味じゃないけど、こんな顔よし性格よしの女の子を逃すわけにはいかない。

「なんかホント、急に寮に入ることになって色々不安だったんだけど、杏奈がルームメイトで助かった。すごい嬉しい。卒業まで一年間、どうぞよろしくお願いします」

寮に入寮することになった顛末を杏奈に話し終えた私はそう言っ
て、深々と彼女に頭を下げた。冗談ではなく、まず間違いなく杏奈
に迷惑をかけまくるであろうことから起こした本音の行動だった。
そんな私に杏奈は優しく微笑んで言った。

「大丈夫。すぐ寮生活にも慣れるし、色々『ルール』のこととか
美弥は心配してたけど、全然心配することないからね」

「ありがとう、杏奈。心強いよ」

「きつと一週間もすれば、すっかり千早女子寮の古株（最高学年
生）だよ」

ほっとする私に向けられる杏奈の眼差しはどこか悪戯気だった。
けれど、ドタバタと寮への引越しをすませてようやく落ち着いたば
かりの私は杏奈のその含みのある表情にまったく気づくことがな
かった。

暗い影を生み出すまぶしい笑顔

「コウ、待って！」

「なんだよ、杏奈」

新学期最初の授業日。

俺は移動教室で歩いていたところを、杏奈に呼び止められた。

杏奈は小学校の頃からの同級生だった。ちなみに高校一年の時からずっと同じクラスで、親友の春哉の彼女だ。正確に言えば二人は幼馴染であり、現段階では付き合っていないみたいだが。

さっさとくつつけばいいのに、と思わずにはいられないジレツタイ関係を二人は築いていた。

高校三年生用の英語の教科書と電子辞書を抱いた杏奈は、軽く俺を睨んでいた。

なかなか美人である杏奈の睨みは、凄味がある。

だが相手がどんな美人であろうと、一方的に睨まれるのは気分が悪い。

「俺が何かした？ってか次、俺たち本館の四階で授業だし、あんまり時間ないと思うけど」

本館の真向かいにある棟に自分のクラスがある俺と杏奈は、学校の中庭に立っていた。職員室などがある本館に続く道が中庭にあるからだ。

英語の授業はレベル分けされており、他のクラスと合同で授業を行う。俺も杏奈も、――去年の夏、はじめてその存在を知った隣のクラスの『彼女』も、同じA組だった。

英語のクラス分けは、単純に上からできる順にA B Cと降下していく。

「移動教室の時は、いつも遅れてくるクセに」

「でも成績はいいから、問題ナシだろ」

「いくら成績がよくても、『素行に問題アリ』じゃ、全部台無しよ」

8

溜息とともに吐かれたその杏奈の言葉には、含みがあった。そして俺は、正確にその含みを理解した。

「お前、なんで知ってんの？」

杏奈の目は怒りで燃えているが、俺はその正反対で冷めきっていた。

全部、メンドクサイ。

「カナちゃんは、私の中学校の時から友達なの。だから泣きつ

いてきた。ねえ、コウ。コウはカナちゃんと付き合ってたんだよね？
なのはどうして——」

「別に最初から付き合ってたんじゃないし。カナちゃんもそれはわかってたと思うけど」

「ふざけないで！」

今にも杏奈から平手打ちが飛び出しそうだったが、俺は態度を改めなかった。

お節介な親友を、うざつたいとすら思った。

だから彼女を、挑発した。

「人の世話する前に、春哉とやることやれば？ 杏奈から迫ったら、きつと春哉も喜ぶよ」

俺より身長の高い杏奈の耳元に顔を寄せて、ささやく。

平手打ちは、覚悟の上だった。

だが頬への痛みはやってこなかった。

杏奈の瞳は怒りを消し、哀れみの色を浮かべていた。

かわいいそう。

彼女の瞳はそう言っている。

一瞬にして、冷たい糸のようなモノが俺の心を締め付けた。

「どうしてコウは、そういうふうになっちゃったの？」

俺を見つめるその瞳には、寂しささえにじんでいた。

何か言おうと口を開きかけたとき、授業のはじまりを告げるチャイムが鳴った。

生真面目な杏奈は、はっと我にかえったように教科書を抱えなおす。それから俺に視線を一瞬やって、教室へ向かって走り出した。俺は本館の入り口へと入っていく杏奈の後ろ姿をその場から一歩も動かず、ただ黙って見送る。

「……バカか、俺は」

「本当にバカだね。つか君、ものすごく杏奈と顔と顔を近づけてたけど、あれ春哉に知られたらぶち殺されるよ。しかもさり氣に破廉恥発言かましてるし」

独り言だったはずの言葉に、呆れた返事がかえってきた。

杏奈と春哉、そして俺にとって三人目の親友である雅貴まへみだった。

「…………お前、この見晴らしのいい中庭で、どこに隠れてたんだよ?。」

神出鬼没な行動をとる雅貴に、思わずそんな疑問が口に出る。

寮生活をする俺にとって、同じ寮生でありルームメイトである雅貴は他の誰よりも一緒に過ごす時間が多いヤツだった。

「まあ、そういう細かいところは気にしちゃいけないよ。さあ、

チャイムも鳴り終わったことだし、遅刻者同士、仲良く教室にむかおうじゃないか！」

雅貴は相変わらず役者のようなよく通る声で言うと、元氣よく俺の肩に手を回し、ぐいぐいと歩き始めた。

ふっと、俺は溜息を吐いた。

このメガネをかけた親友の、すべてをわかっていて何も言っていない態度がありがたくもあり、なにより痛かった。

俺が『彼女』をはじめて知ったのは高校二年生、七月の終わり。
学校全体が明日からの夏休みにどこか浮足だっている頃。

俺の気分は周囲の人間とは真逆で、どこまでも暗かった。
高校の寮で生活をする俺は家に帰りたくない気持ちでいっぱいだった。

あんな家には帰りたくない。
親父の顔なんて、見たくない。

学校の中庭のベンチで、ただそんなことを考えていた。
だから、あくまでも偶然だったのだ。

暗い気分を一瞬で吹き飛ばした、あの笑顔に出逢えたのは。

「コウ、落としちゃってるよ」

そう呆れた声で、俺が握っていたその日最後のHRで配られたプリントを拾ったのは『彼女』ではなかった。白いプリントについてしまった土埃を払い、俺にそれを手渡したのは親友の杏奈だ。

でもその杏奈の隣に立っていた『彼女』と俺の視線が何気なくぶつかったとき、『彼女』は笑った。

それは見知らぬ人間に挨拶程度にむけられる軽い笑みだった。

けれど俺が今まで見たことがないぐらいに苛烈で、痛いぐらいに眩しく、俺の体のどこかが溶けてしまいそうなぐらいに、甘い笑顔だった。

そんな感情のすべてが始めてで、俺は戸惑った。

何がなんだかわからなかった。

そしてそれは俺にとって、新たな苦痛のはじまりと言ってもよかった。

眩しい太陽は暗い影を生み出した。その影は今に至っても、消えてはくれない。

どよんだ汚い影。

正直、自分で自分が笑える。

恋は痛みを伴うもの。

そんなどっかで聞いたような言葉そのままの状況に自分が置かれるなんて。

その日から俺は、何気ない瞬間にふと『彼女』のことを考える。とは言っても、俺と彼女の間にはなんの関係もない。しいていえば、英語のクラスが一緒なわけだが、そのクラスも俺と彼女の席は廊下側と窓側という距離がある。

言葉を交わしたことなく、一度もなかった。ギリギリ知合いの範囲だ。

前向きに考えれば、きっかけは簡単に作れるんだと思う。彼女は杏奈の友達だ。

杏奈に根回しを頼み、まずは友達に――――。

……………無理だ。

きつと。

俺は女友達が多いが、同時にそれ以上の女子に嫌われている。嫌われる要素をたくさん持っている。

自分自身の行動がどういふ結果を生んでいるのか、わからないほど馬鹿じゃない。ただわかっていてやめられない俺は、大馬鹿者だ。

「コウ」

そう俺の名を呼んで、にっこりと微笑みかけてくるのは朱色のリボンを結んだセーラー服姿の女の子。俺の高校は男女共にブレザーだから、こいつは他校の生徒だ。

「ねえ、日曜日ヒマ？」

俺の腕と自分のそれを絡ませ、そう尋ねてくるこの子の積極性は嫌いじゃない。己の身の不運を嘆き、一番大切な者の存在に気付いていながら何もしないでいる俺には、お似合いの相手だ。別にこのなかなかカワイイ女の子の頭が空っぽだというわけじゃない。空っぽなおは、俺のほうだ。

俺を好きだといい、身を寄せてくるこの子は、少なくとも俺よりも勇気があり、自分に素直なのだ。

学校帰りの放課後。俺との日曜日の約束を取り付けた彼女と二人で、騒がしいファミレスに入る。

「コウの目って、ホントにうらやましい。髪の毛も何もしなくて、茶色だし」

アイスティーを置いたテーブルに頬づえをつく彼女は、俺の顔を見つめる。彼女の目が、俺の髪の毛、俺の瞳を眺めているのがわかる。

「生まれつきでそういう目って、ホントにいいなあ」

素直なその感想に、俺は若干いらついた。

目の色も、髪の毛の茶色さも、俺がアイツの子供だという証だから――。

「悪い。俺、帰る」

「えっ？ ちょっと……」

「またメールするから」

自分でも子供っぽいとわかっている。

それでも俺は、我慢できなかった。

一口も口をつけなかったアイスティーと彼女を残し、俺はファミレスを後にする。

寮に帰るんだ。

寮に帰れば雅貴や春哉がいる。

二人の下らない会話を聞いているほうが、ずっと心が落ち着く。

早足になっていたのは無自覚だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0824s/>

たとえば、君が視線を捧げるその先に

2011年10月8日02時27分発行